



国際シンポジウム参加記

はなにか「人類の記憶と記録」に参加した。僅か2日間の会期だが、密度高い研究発表及び質が高い討論で、刺激に満ちた知的盛宴であった。

人類文化を考えるには、文字資料より「非文字」の部分は遥かに豊富だ、という事実は常に忘れがちである。それは文字の力によるものであり、「研究資料」としては文字化したものが比較的扱いやすいという面もある。しかし、人類文化を「立体的」、「総合的」に把握するには、文字化されたこと以外の人間の活動、しぐさ、音・におい、感触、景観、味覚、写真などを分析する必要がある。その第一歩としては資料を蓄積・整理することである。世界中異なった民族の身体技法、祭祀芸能、民俗技術などを如何に研究資料として「体系化」するかは、極めて重要な課題であり、困難に満ちた挑戦でもある。

この雄大な構想は今回のシンポジウムを通して、その実現の可能性を見ることができた。今回のシンポジウムは、絵、写真などのメディア、身体技法・祭祀芸能、民具と民俗技術、非文字資料の情報化と教育という4つのセッションに分けて研究報告・討論された。いずれも従来の研究分野の蓄積を踏まえ、新しい「非文字資料」という枠組みに位置づけ、分析の手法や扱う対象はそれぞれであるが、千差万別な人類の知識・観念・行為を一つの土台で論議することは「新たな学問分野の創出」、「普遍的な研究方法論の確立」への第一歩となると思う。

川田氏の基調講演で、お互いに影響しあう文化の比較研究は重要であるが、それぞれ独自に起源・発展してきた文化間の比較研究が同時に行わなければならないという「文化の三角測量」説はきわめて刺激的・魅力的な問題提起だと思う。これを応じるような形で、今回の研究報告は日本、中国、韓国、フランス、ロシア、イギリス

などの国の「非文字」資料が分析・比較された。今後はこれを踏まえ、範囲を拡大し、「人類文化を覆う」ことへ向けて着実に進めていくと予想される。

また、非文字資料の情報化と教育についての報告は先端科学技術を取り入れ、オンドロロジー理論などの電子情報工学分野の理論・手法を文化研究に応用する試みは、今後の人文科学の研究に一つの方向を示している。これは学際間の緊密な連携でこそできることで、神奈川大学21世紀COEプログラムの研究体制の強さを見ることができた。

我々の「中山大学中国非物質文化遺産研究センター」は2004年4月に中国教育部重点研究基地として認定され、演劇、民間伝承、伝統行事などの「非物質文化遺産（無形文化財）」を中心にプロジェクトを組んで、研究調査を進めていた。（現時点で国のプロジェクトとして進めているのは「中国影絵芝居の調査研究」と「無形文化財分布図の製作に関する基礎研究」である）我々が研究対象としているのは殆ど「非物質的」であり、「非文字」的なものでもある。従って、シンポジウムの報告から参考にすることは極めて多い。当センターと神奈川大学21世紀COEプログラムとの交流は今年始まったばかりだが、今回のシンポジウムを通じて、相互の理解を深めることができ、今後共通の分野においてさらなる緊密な関係を築くことを期待している。ちなみに、神奈川大学21世紀COEプログラムの目標の一つは「国際的な研究ネットワークの形成」である。我々は海外提携研究機関として、これを実現するために全力で協力をしたい。

最後にシンポジウムの主催者及び関係者へ心から感謝の意を捧げたい。

人類文化研究の新しい天地

陳 勤建（中国 華東師範大学中国民俗保護開発研究センター所長）

二年前に、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究拠点リーダー・福田アジオ教授の招きによって、私どもの「華東師範大学中国民俗保護開発研究センター」が、その提携研究機関となった。以来、神奈川大学COE側は、RA研究員、博士後期課程在学の中国人留学生・彭偉文を本研究セン

ターに派遣し、2005年9月17日から9月30日の間に、短期訪問研究員として研究を行った。また、本研究センターの文芸民俗学専門の博士課程在学生の毛巧暉、尹笑非両氏も、前後して神奈川大学に行き、訪問研究員として研修し、その目標を円満に達成した。2005年11月25日～28日に、私は招待に応じて神奈川大学21世紀COEプログ

国際シンポジウム参加記

ラム第1回国際シンポジウムに参加した。交流によって、今回の国際シンポジウムに参加し、私は神奈川大学21世紀COEプログラムのテーマの「人類文化研究のための非文字資料の体系化」へ新たな認識ができた。これは人類文化研究の新しい天地なのである。

拠点リーダー福田アジオ教授のシンポジウムでの挨拶にあったように、人類の歴史においても、現実のわれわれの日々の生活場面においても、人々の交流と活動の文化は、文字で行われることは少なく、その多くは非文字で行われているのである。これらの非文字的文化は、行動などの形で、我々の日常生活に伴って流れており、人類の発展に大きな役割を果たしてきた。しかし、歴史上、これらを記録することはまれであった。事実はその通りである。歴史学家は、彼らが後代の人に伝えていきたい、一回性の重大な歴史事件だけを記録し、人類の日常的で平凡な、繰り返して行う伝承生活をほとんど無視していた。19世紀半ば以来、民俗学、人類学の発生につれて、人類は自分及び異民族の伝承的生活文化と文化遺留の記録整理及び研究を行ってきて、科学的に人類文化を研究する領域を開拓した。だが、元来の学科の理論視野が限られており、研究者の学識が不足していたがゆえに、我々は人類文化研究に関心を持つと同時に、一本の木に目を惹かれて森が見えないようなこともあった。もっと範囲の広く、量的に豊富な非文字資料を深く理解して把握することを行っていないのである。神奈川大学21世紀COEプログラムの研究は、この欠陥を補い、学術の国際的最先端を占め、世界文化研究の中で新しい天地を開いた。

この21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の、当今の文化研究への貢献は、その従来の学科の境を越えたことにもある。このプログラ

ムは民俗学に基づきながら、学科の制限に束縛されておらず、ほかの学科に自主的に切り込み、新しい学際連合で、人類文化を深く探求する。そして、このプログラムは上層文化と基層文化、大伝統と小伝統の境を破り、人類文化を文化の破片のような形ではなく、完全な形で立体的に示した。今回のCOE国際シンポジウムで、私は幸いに、色々な国からの様々な分野の学者たちが一堂に集まり、それぞれの視点と学術的立場から、人類の多方面の非文字文化資料を研究していることを見ることができた。このような研究を続けていけば、神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の研究は必ず成功を収め、人類への永久の貢献を果たすことができると思う。

神奈川大学21世紀COEプログラムは、当初、私どもの華東師範大学中国民俗保護開発研究センターをその海外提携研究機関とし、ともに博士課程在学生の育成と研究協力の計画をたてた。その内容は、若手研究者の育成、主に相互派遣、調査及び研究の指導などがある。日本における唯一の大学院歴史民俗資料学研究科を有する神奈川大学は、現在の日本の、そして世界の極めてわずかな非文字資料の蒐集・整理及び体系化を行うのに最適な研究拠点である。このような相互提携は、中国の非文字資料の体系化研究をさらに進め、両国の若手研究者の育成及び大学教育の発展を推進することが期待できる。これは、双方にとってメリットのあることである。われわれはこれからもさらに大きい成果を収めるよう努力していく。

そして、ここで神奈川大学21世紀COEプログラムが、本研究センターの研究及び若手研究者育成に協力してくれることに、感謝を申し上げる。

「非文字」と「非言語」のあいだ

村上 史展（中国 香港大学日本研究学系准教授）

2005年11月26日、27日の二日間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘を受けて、第1回COE国際シンポジウム「非文字資料とはなにか 人類文化の記憶と記録」に参加させていただいた。わたしは専門が文学ということもあり、またシンポジウムに招かれた同僚の文化人類学者の代役ということもあって、当初「非文字資料」

というものにある種の違和感を覚えていた。わたしはライブラリー・ワークはするが、フィールド・ワークというものを満足にしたことはない。また、非文字資料といって非言語資料といわないのは非文字言語や口頭伝承を含めているからなのだろうが、伝承文学に深い興味を持っているわけでもない。むしろ、自分の文章は欄に上げ